

研究ノート

『スーダン遺跡紹介』 第9回

ジェベル・バルカル (Jebel Barkal) その2

坂本麻紀

はじめに

前回は古代エジプト第25王朝（クシュ朝；714-656 BCE¹）の王としてエジプトを支配したクシュ王国（Kingdom of Kush）の王たちが崇拝したアメン神（Amen）と、そのアメン神が住む「聖なる山（Holy Mountain）」ジェベル・バルカルについて紹介しました。ナイル川第4急湍のナパタ（Napata）地域にあるジェベル・バルカルは、エジプトの新王国時代（New Kingdom；1550-1069 BCE²）にはヌビア（Nubia）³地域の羊頭のアメン神が住む山と考えられていました。新王国時代にヌビア地域を支配していたエジプト王たちがアメン神をはじめエジプトの神々の神殿を山の麓に造営してることなどから、この地は宗教上重要な役割を担っていたと考えられます。新王国時代に築かれた神殿群は第25王朝の基礎を築いたクシュ王ピアンキ（Piankhy もしくはパイ Piye；744-714 BCE）の時期には既に荒廃しており、ピアンキがジェベル・バルカルの麓のアメン神殿の大規模な改修・増築を行い、長さ156mのヌビア地域最大の神殿が造られたことが分かっています。

第25王朝の時期はヌビア地域の編年ではナパタ期（Napatan Period；1000-300 BCE⁴）に属しますが、ナパタ地域を活動の拠点としていたナパタ期だけでなく、メロエに拠点を移したメロエ期（Meroitic Period；BCE 300-350 CE）にも、クシュ王たちはジェベル・バルカルの麓に神殿や王宮を造営しており、千年以上に亘ってジェベル・バルカルは重要な場所であったといえます。今回はジェベル・バルカルの麓に造営された建造物の概要を簡単に紹介いたします。尚、特に出典がない写真については筆者が撮影したものです。



図1 夕暮れのジェベル・バルカル（東から）

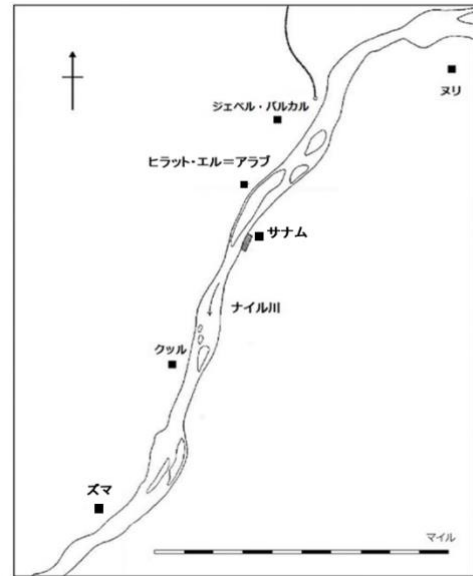
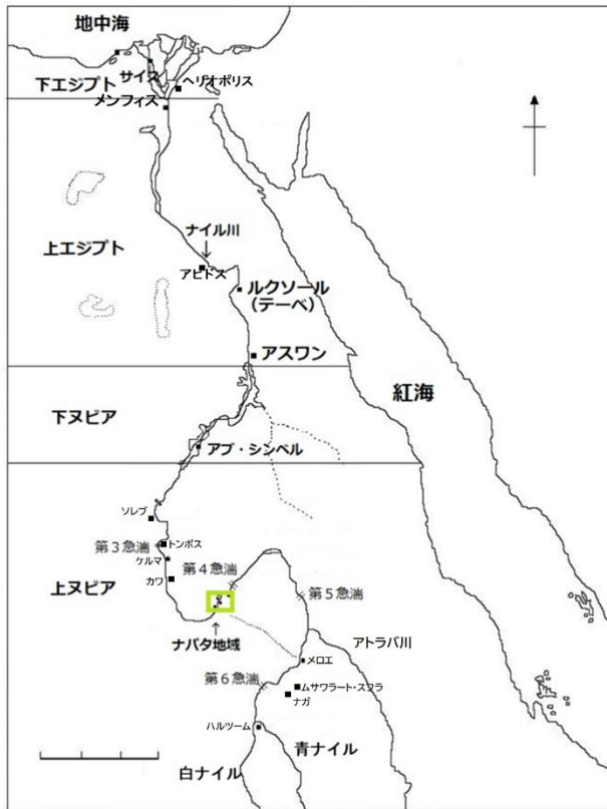


図 2

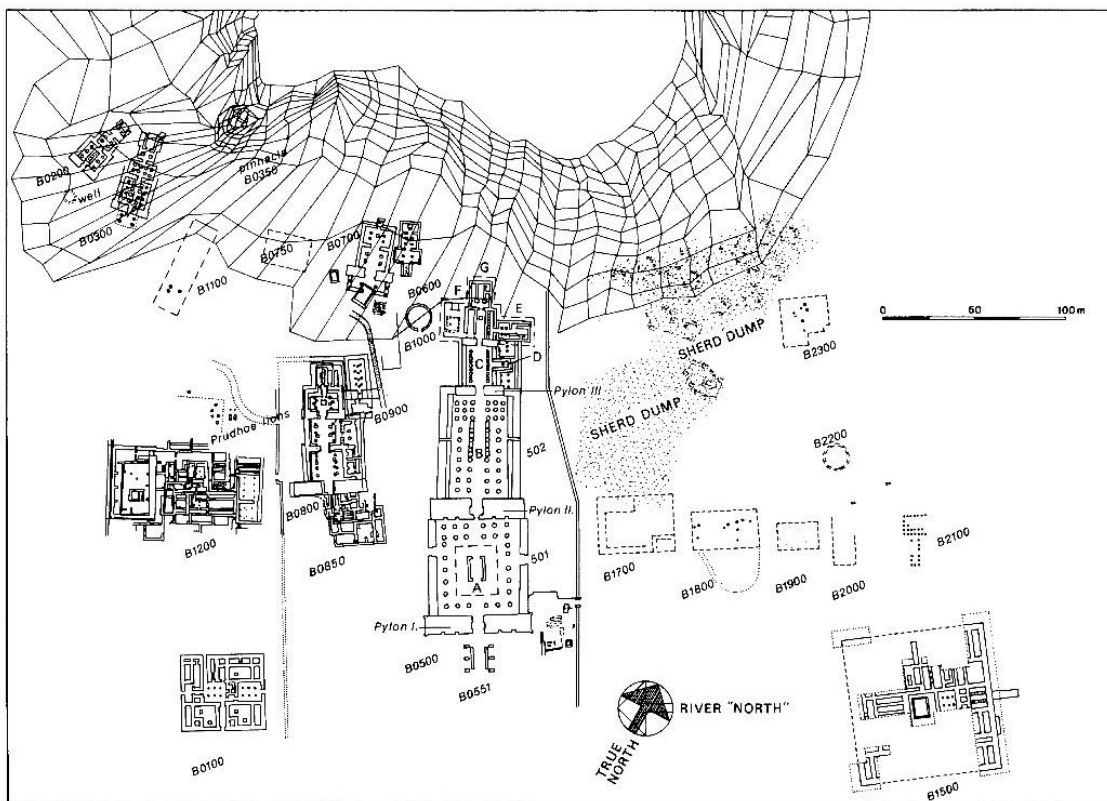
左 エジプト・ヌビア全図

右 ナパタ地域拡大図

(Dunham 1950, Map 1 改編)

下 ジェベル・バルカル遺跡分布図

(Török 1997, Fig. 5 改編)



1. ジェベル・バルカルでの発掘調査

ジェベル・バルカルで考古学的な調査が本格的に行われたのは、1916 年から 1920 年にかけてアメリカの考古学者ライスナー（George A. Reisner）率いるハーバード大学・ボストン美術館の合同調査隊が行った発掘調査です。その時の調査のうちジェベル・バルカルの正面に位置する神殿や王宮などの発掘調査に関しては、1970 年にダナム（Dows Dunham）が出版した「The Barkal Temples」にまとめられており、ジェベル・バルカルの西側に位置するピラミッド群の発掘調査については、1957 年にダナムによって出版された「The Royal Cemeteries of Kush Vol.4; Royal Tombs at Meroë and Barkal」にまとめられています。

2013 年にスーダンの National Corporation for Antiquities and Museums (NCAM) が国際的なチームやミッション 5 つに対してジェベル・バルカルでの考古学的な調査を行う許可を与え、発掘調査や遺跡の修復・保存プロジェクトが開始されました。その中の 1 つ Timothy Kendall と El-Hassan Ahmed Mohamed が率いる「The NCAM Jebel Barkal Mission (part A)」は、約 100 年前にライスナーが調査を行ったジェベル・バルカルの神殿や王宮などがある地域の発掘調査を行い、それらの成果をまとめた「A Visitor's Guide to The Jebel Barkal Temples」を 2016 年に発行しました。この Visitor's Guide によれば、ジェベル・バルカルの麓からは、エジプトの新王国時代からヌビア地域のメロエ期までに築かれた神殿や礼拝堂（Chapel）、王宮など 25 の建造物が見つかっており⁵、ライスナーの時期に十分な調査や報告が行われなかった遺構や、ライスナー以降の調査で見つかった建造物についても確認することができます。ジェベル・バルカル周辺では現在も発掘調査が行われていますので、今後も新たな建造物が見つかる可能性が十分あります。今回はこの Visitor's Guide の情報を基に、現地で撮影した写真などを入れながら遺跡の紹介をしたいと思います。

2. ジェベル・バルカルの神殿、礼拝堂、王宮

聖なる山ジェベル・バルカルの麓で見ついている主な建造物の概要を紹介します。建造物の名称はアルファベットの B（遺跡の場所 Barkal を示しています）と 3 桁の数字が組み合わされたものとなっていますが、これはジェベル・バルカルを最初に発掘したライスナーが付けた番号です（現在でも調査報告ではこの番号が活用されています）。神殿の位置に関しては、少々分かりにくいですが図 2 下を参照してください。

・ B100 : A Meroitic Palace.

B100 はメロエ期の王宮跡です。ライスナーはこの建物を administrative building と報告していますが、現在はメロエ期の王宮であったと考えられています。大きさは 33.2m×37.1m で、6 本の柱（左右に 3 本ずつ）を持つ部屋が 2 つ、2 階へ通じる階段があったことが報告されています（2 階部分は確認できず）。また、1 階には 23 の部屋があり、そのほとんどはドアがない構造となっています。B100 は残念ながらライスナーが発掘した後、埋め戻したため現在は遺構を確認することができません。

・ B200 : Temples of the Goddess Hathor

第 25 王朝のタハルカ王（Taharqa ; 690–664 BCE）がハトホル女神に捧げた神殿。隣接する B300 のムウト女神と同じく、ハトホル女神はジェベル・バルカルの羊頭のアメン神の

妻としてジェベル・バルカルの中の中に住んでいると考えられています。この神殿の至聖所はジェベル・バルカルの中の中に造られるなど、神殿の構造もおそらく B300 と同じようなものだったと考えられます。建造時は 27m ほどの長さがあり、塔門や列柱付きの中庭、列柱室などがあったと考えられますが、盗掘や石材が盗まれた影響により、わずかに残っている至聖所も野ざらしとなっており、非常に状態の悪い神殿となっています。



図3 左：B200 全景、右：B200 至聖所の壁面に描かれた女神とタハルカ王？

・ B300 : Temples of the Goddess Mut

第 25 王朝のタハルカ王がムウト女神に捧げた神殿。隣接する B200 のハトホル女神とともに羊頭のアメン神の妻としてジェベル・バルカルの中の中に住んでいると考えられています。B200 と同じく神殿の至聖所はジェベル・バルカルの中に造られています。B300 は修復や保存がなされていることもあり、現在でも岩窟の至聖所の残りは良く、エジプトでも人気のあったベス神の姿をした柱や、彩色が残っている壁画が神殿内部で確認できます。建造当時は 35m ほどの長さがあったようですが、残念ながら現在はその 1/3 程度しか残っていません。しかし、岩窟の至聖所を出たところには、通称「ハトホル柱」と呼ばれるハトホル女神の顔が柱頭に施された柱を 2 本が建っており、そこが神殿の中庭であったことが分かります。ジェベル・バルカルに行く機会があれば、ぜひ訪れていただきたいお勧めの神殿の 1 つです。



図4－1 左：B300 全景、中央：ベス神の柱、右：ハトホル柱



図4－2 左：B300 至聖所入口、右：岩窟内の壁画

・ B300-sub : The Eighteenth Dynasty Antecedent of B 200 and 300

B300-sub は新王国時代第 18 王朝の時期に建造された神殿で、その基礎の上に第 25 王朝のタハルカが B300 を建造したと考えられます。現在でも B300 の前に建つハトホル柱の下に新王国時代の白い砂岩製のブロックが確認でき、これらのブロックがアメンヘテプ 4 世 / アクエンアテン (Amenhetep IV / Akhenaten ; 1351-1334 BCE) の時期の「タラタート (Talatat)」ではないかと考えられています。しかし、この神殿は複数の女神に捧げられたものであることから、アテンを唯一の神としたアクエンアテンではなく、もう少し後のツタンカーメン (Tutankhamen ; 1333-1323 BCE)、もしくはホルエムヘブ (Horemheb ; 1319-1305 BCE) の時期に建てられた神殿ではないかと考えられます。この新王国時代の B300-sub は岩窟ではなく、後にタハルカ造営した B300 の軸線とも異なっています。

・ B350 : The Pinnacle Monument of Taharqa

B350 はジェベル・バルカル (Jebel Barkal) の奇岩を指します。この奇岩はウラエウス (Uraeus) と呼ばれる下エジプトを象徴するコブラが王冠を被り、頭を持ち上げて直立した姿に見えることから、新王国時代のラメセス 2 世 (Rameses II ; 1279-1213 BCE) の大神殿でも描かれていました。第 25 王朝のタハルカの時期には切り立った断崖と特徴的な奇岩の間に足場を作り、奇岩に文字を刻み、金箔を施し、頂上部分に小さな彫像 (おそらく王像) を置いたことが調査によって分かっています。

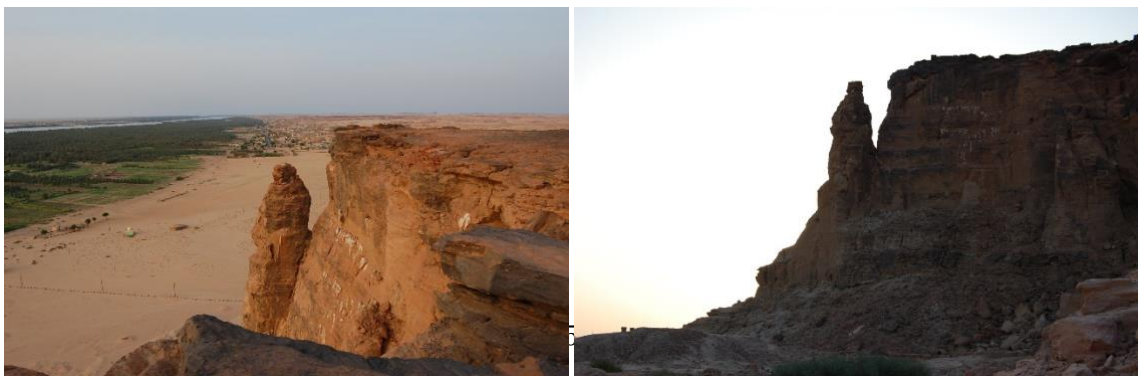


図5 左：奇岩 B350（ジェベル・バルカルの頂上より）、右：夕暮れの奇岩 B350

・ B500 : The Great Temple of Amun

B500 は羊頭のアメン神に捧げられた長さ 156m の大神殿であり、ヌビア地域に建造された神殿の中でもっとも大きな神殿です。古くは新王国時代の第 18 王朝から第 20 王朝のエジプト王たちによって増改築がなされ、クシュ王ピアンキの時期に玉座の間（B520）、42 本の柱をもつ列柱室（B502）、列柱付きの中庭（B501）、そして塔門が造られ、大規模な増改築が行われた結果、全長 156m の大神殿となります。

新王国時代にヌビア地域がエジプトの支配を受けていたことは、スーダン遺跡紹介で何度かお伝えしていますが、このアメン大神殿 B500 の建立に関わったエジプト王たちは、トトメス 3 世（Thutmose III ; 1479-1425 BCE）、アメンヘテプ 4 世（アクエンアテン）、ツタンカーメン、ホルエムヘブ、セティ 1 世（Seti I ; 1294-1279 BCE）、ラメセス 2 世など新王国時代を代表する有名な王の名前が見られます。トトメス 3 世の時期のアメン神殿は日乾煉瓦製であり（大きさは不明）、アメンヘテプ 4 世の時期に石造りの全長 30.5m の神殿となります。その後、ラメセス 2 世の時期に 56 本～60 本の列柱室が造られ（未完で終わる）全長が 104m となります。このラメセス 2 世の未完成の列柱室は、ピアンキの時期に柱の数が 42 本に変更されて完成します。

ピアンキは列柱室 B502 と列柱付きの中庭 B501 の壁にレリーフを施しています。その中には馬やチャリオットなども描かれており、おそらくピアンキの治世 21 年に行われたエジプト遠征の様子が描かれたものと考えられます。現在、エジプト考古学博物館が所蔵するピアンキの「戦勝碑（JE48862）」（Great Triumphal Stela もしくは Victory Stela）は、もともと列柱付きの中庭 B501 に設置されていたようです。ピアンキは第 1 塔門の正面に 6 体の羊の像を設置していますが、それらはジェベル・バルカルから 500km ほど離れたソレブ（Soleb）のアメンヘテプ 3 世（Amenhetep III ; 1388-1351 BCE⁶）の神殿から持ってきたものになります。ピアンキの息子のタハルカの時期には、アメン大神殿の至聖所の手前の B506 に聖舟（Bark）の台座が置かれ⁷、第 25 王朝最後の王タヌタマニの時期には、列柱室 B502 の中央に祠堂もしくは聖舟の台座が置かれていたようです。

ピアンキの造ったアメン大神殿はエジプト王プサムテク 2 世（Psamtik II ; 595-589 BCE）のヌビア遠征の際に酷い破壊を受け、紀元前 6 世紀後半に再建されたようです。その後も何度か再建され、メロエ期にはアメン大神殿に祠堂などが追加されることになります。



図 6－1 左：アメン大神殿 B500 全景、右：第二塔門と列柱室 B502



図 6－2 左：タハルカの聖舟の台座、右：ソレブから持ってきた羊の像

・ B501、B551 : B 500 Kiosks

B501 の祠堂 (Kiosk) は紀元後 1 世紀中頃にメロエ期の王ナタカマニ (Natakamani) とその王妃で共同統治者であったアマニトレ (Amanitore) によって列柱付きの中庭 (B501) の中に建てられました。大きさは 7.85m×10.82m です。

B551 はアメン大神殿 (B500) の第 1 塔門の入口の前に建てられた祠堂で、大きさは 7.2m×9.6m です。建造者は不明ですがこの祠堂の壁画などからメロエ期のものと考えられています。新王国時代にソレブに建造されたアメンヘテプ 3 世の神殿にあった羊の彫像 6 体が、ピアンキの時期にジェベル・バルカルへ運ばれ、B500 の第 1 塔門の入口に左右に 3 体ずつ置かれました。B551 はその羊の彫像の間に建てられたことが調査で分かっています。



図 7 左：B501 祠堂の遺構 (赤枠の部分)、右：B551 祠堂の遺構 (赤枠の部分)

・ B561-B560 : The Mammisi Temple and Kiosk

B561 はメロエ期のマンミシであり、B560 は B561 に附属する祠堂です。日乾燥瓦製で漆喰の上に鮮やかな色が塗られた B561 は、壁や柱のレリーフのモチーフ等からマンミシであると考えられます。マンミシは古代エジプトのコプト語で「誕生の場所」(birth place) や「誕生殿」(birth house) を意味しており、エジプトの末期王朝時代 (Late Period ; 664-332 BCE) からローマ支配時代 (Roman Period ; BCE 30-395 CE) にかけて 500 年以上、エジプト各地の三柱神 (triad) の子供の神と関係している建物です⁸。三柱神とは父、母、子供の

聖なる家族からなる三柱の神々のグループを指します⁹。エジプトではエドフ（Edfu）、デンドラ（Dendera）、フィラエ（Philae）の神殿でもマンミシが造られており、それぞれ三柱の子供の神に捧げられた建物となっています。王は子供の神と見なされ、マンミシは王が誕生した場所として毎年儀式が行われていたと考えられます。この B561 はスーダンで初めて見つかったマンミシですが、王の名前が確認できないため、誰のものかは分かっていません。

B560 の祠堂はマンミシ B561 に新たに追加された建物と考えられますが、B561 と違って石造りとなっています。壁面に馬やチャリオットが描かれており、残された王名からメロエ期の Amanakhareqerema 王ではないかと推測されています。B561 と B560 はおそらく紀元後 2～3 世紀まで利用され、地震によって破壊されたと考えられています。

・ B600 : The Enthronement Pavilion

ナパタ期のクシュ王が建てた即位式のための東屋。この B600 は B700 と並んでジェベル・バルカル（Jebel Barkal）の断崖の下に位置しており、少なくとも 2 度、落石で大きなダメージを受けていることが分かっています。また B600 のファウンデーション・デポジット（foundation deposit）から新王国時代のエジプト王トトメス 4 世（Thutmose IV ; 1400-1390 BCE）の名前が入った飾り板が見つかっており、もともとトトメス 4 世の時期の建造物（用途不明）があった場所に B600 が建てられたことが分かっています。紀元前 3 世紀頃に建物が破壊されたため、王の即位式の東屋として再建されたと考えられますが、どの王のものか、またどの神と関連する建物なのかということは分かっていません。

・ B700 : The Temple of Osiris-Dedwen

オシリス・デドゥン神の神殿。B700 は B600 と並んでジェベル・バルカル（Jebel Barkal）の断崖の下に位置しており、ナパタ期の王アトラネルサ（ Atlanersa ）とセンカマニスケン（ Senkamanisken ）によって紀元前 650～630 年頃に建てられたと考えられます。この建物の用途は不明ですが、アメン神に捧げられたものと考えられ、至聖所には冥界の神オシリスに対する長い銘文があります。オシリスはここでは亡き王と関係するヌビアの神デドゥンと結合し、オシリス・デドゥンとなっています。B700 からはアトラネルサの聖舟の台座（MFA 23.728）が見つかっています。



図 8 左：B700 の遺構（赤枠）、右：B800 の遺構（赤枠）、B900 の遺構（青枠）

• **B800** : The Temple of Amun of Karnak at Napata

B800 はナパタにおける「カルナックのアメン」の神殿です。アメン大神殿 B500 の修復中にアメン神の崇拝が途切れないよう一時的な代用施設としてカシュタ (Kashta) やピアンキなど第 25 王朝に先行するクシュ王たちと第 25 王朝の王たちによって B800 が日乾煉瓦で建てられました。のちに B800 はアンラマニ (Anlamani) によって石材で再建され、第二のアメン神殿となります。アメン大神殿 B500 はジェベル・バルカルに住んでいる羊頭のナパタのアメン神のための神殿ですが、B800 は人の姿をしたエジプトのカルナックのアメン神のための神殿とされました。アンラマニによる B800 の再建は、第 25 王朝の終焉によりエジプトのカルナック神殿へアクセスできなくなったためと考えられます。

• **B900** : The "Lion Temple"

B900 のライオン神殿は B800 の北側に付随する小さな神殿です。この神殿は 2 つの時期からなり、最初はピアンキの治世に建造され、次はその約 700 年後のメロエ期にピアンキの時期の神殿から石材を再利用し、同じ場所に新たな神殿が築かれたと考えられます。メロエ期のものは、ナガ (Naqa) やムサワラート・スフラ (Musawwarat es-Sufra) といったメロエ期の遺跡で見られるアペデマク (Apedemak) というライオンの姿をした神を祀った「ライオン神殿」と同じ様式の建物であり、規模も同等となっています。アペデマク神はアメン神と深い関係があると見られており、メロエ期にはおそらくジェベル・バルカルに住んでいると考えられました¹⁰。B900 は残念ながら他のライオン神殿のように壁画などは残っていません。説明だけではイメージができませんので、参考までにメロエ期の遺跡ムサワラート・スフラのライオン神殿とその壁画に描かれたアペデマク神の写真を図 9 に掲載します。

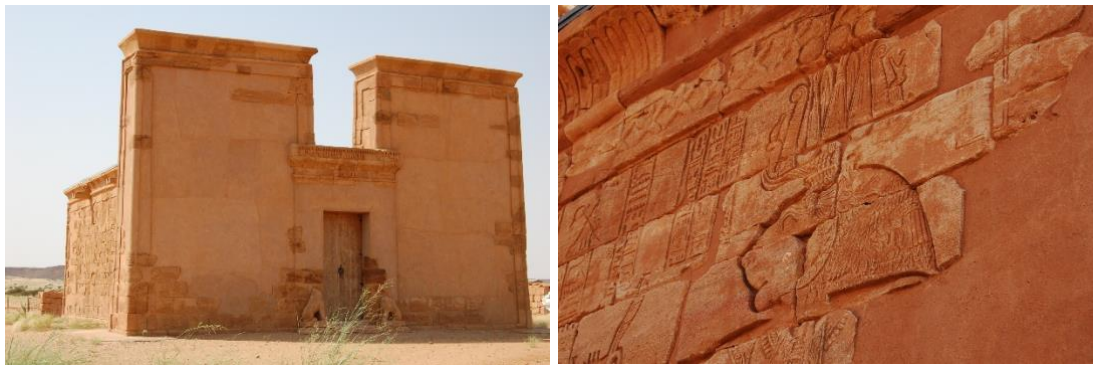


図 9 左：ムサワラート・スフラのライオン神殿、右：アペデマク神 ※B900 ではありません

• **B1100** : The "Great House" at Jebel Barkal.

B1100 は B200 と B300 に隣接する神殿です。残念ながら神殿で使われていた石材が 19 世紀に盗まれ、建物の平面図を再現することができない状況ですが、おそらく B200 や B300 と同じような神殿であったと考えられます。また、残された石材から、B1100 の神殿はエジプトの第 18 王朝末期、ナパタ期、そしてメロエ期の 3 つの時期があったことが分かっています。メロエ期のレリーフが刻まれた石材からは、紀元後 1 世紀中頃に共同統治を行っていたナタカマニ王 (Natakamani) とアマニトレ女王 (Amanitore) の王名が入ったカルト

ウーシュ (cartouche) が見つかっています。エジプトで王権と深く関わるハゲワシの姿をした女神ネクベト (Nekhbet) とコブラの姿をした女神ウアジェト (Wadjet)¹¹が壁画に描かれていることから、この二女神に捧げられた神殿であったと考えられます。この二女神はウェレトヘカウ (Weret Hekau)「大いなる呪術」(Great of Magic) というコブラの頭を持つ女神と結びつけられることがあり、B1100 はウェレトヘカウ女神から王が王冠を受けとる「ペル・ウェル (Per Wer)」(Great House) と呼ばれる施設であったと考えられます。

• **B1200** : The Napatan palace and Aspetla throne room.

B1200 はナパタ期の王宮であり、クシュ王アスペルタ (Aspetla) の玉座の間があります。約 70 m²の建物は何度も建て替えが行われており、8層の時期 (各層は 100-150 年ほど) から成ることが近年の調査で分かっています。最も古い層はエジプトの新王国時代 19 王朝のラメセス 2 世の名前の入ったブロックが見つかることから、ラメセス朝と考えられています。ラメセス朝の上層は紀元前 8 世紀初期以降のナパタ期のものであり、最も新しい層はメロエ期初期のものと考えられます。B1200 は 60 室以上の部屋を持つ王宮でしたが、おそらく紀元前 1 世紀中頃に捨てられ、すぐそばの B100 がメロエ期の新たな王宮となったと考えられます。2007 年の発掘ではアスペルタの玉座の間が見つかり、その壁には壁画が施され、4 本の柱で支えられた天井には漆喰が塗られウジャトの目の連続文様が描かれていたと考えられます。柱はパピルスをつぼみの形をしており、柱頭には太陽円盤の冠を載せた羊頭が 4 面、柱の表面には女神やヒエログリフが施されていました。この部屋の北東端には矩形の床面に 4 つの砂岩製のソケットがあり、ここに木製の柱を持つ天蓋のようなものが置かれ、その天蓋の下に玉座が設置されていたと考えられます。アスペルタの時期の王宮は火災と破壊にあったとみられ、おそらくこの破壊は紀元前 593 年に起こった第 26 王朝のプサムテク 2 世のヌビア地域への軍事遠征によって行われたものと考えられます。プサムテク 2 世の軍隊はジェベル・バルカルー帯を破壊したことが知られています。



図 10 B1200 の遺構 (赤枠)

• **B1700** : A Palace of the High Priest of Amun (?)

B1700 はアメン大神殿 B500 の北東 50m に位置し、王宮のような建物であったことが 2015

年の調査で分かっています。大きさは 16 m²と王宮としては小さいため、おそらく隣接するアメン大神殿の大司祭の住居と考えられています。放射性炭素年代測定では紀元前 1 世紀～紀元後 1 世紀となっており、メロエ期のものであることが分かっています。

3. まとめ

今回はジェベル・バルカルの麓に造営された神殿や王宮などについて紹介しました。今回紹介した神殿や王宮の多くは、人為的な破壊や劣化・風化の影響により、遺跡の状態が非常に悪く、実際に遺跡を訪れてもどのような構造の建物であったのか知ることは難しい状況です。今回参考資料として利用した「A Visitor's Guide to The Jebel Barkal Temples」には、発掘時の写真や遺跡のプラン図だけでなく、建物の復元予想図なども示されており、いつ頃の時期にどのような建物がどういった位置関係で建っていたのか、ということを知るには非常に便利な資料だと思います。ただし、復元予想図などはあくまでも 1 つの案である、という点を忘れてはいけません。

4 月中旬からスーダンでは正規軍と民兵組織の戦闘が続いており、首都ハルツームでの空爆や銃撃戦で死者や負傷者、難民も多く出ていると連日ニュースで流れています。停戦協議が行われるようですが、早く紛争が終結し、多くの人が平和な日常を過ごせるようになることを祈るばかりです。

参考文献

Dunham, Dows 1970, *The Barkal temples*, Museum of Fine Arts, Boston.

Kendall, Timothy & Ahmed Mohamed El-Hassan 2021, *A Visitor's Guide to The Jebel Barkal Temples*, The NCAM Jebel Barkal Mission, Khartoum.

<http://www.jebelbarkal.org/frames/VisGuide.pdf> (last accessed January 26, 2023).

Kendall, Timothy 2020, *Jebel Barkal: "Karnak" of Kush*, in G. Emberling & B. B. Williams (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Nubia*, Oxford University Press, New York, 2020, 449-474.

Török, László 1997, *The Kingdom of Kush : Handbook of the Napatan-Meroitic Civilization*, Leiden, Brill.

Kockelmann, Holger 2011, "Birth House (Mammisi)", *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, 1(1), 1-7.

<https://escholarship.org/uc/item/8xj4k0ww> (last accessed January 29, 2023).

イアン・ショー&ポール・ニコルソン, 『大英博物館古代エジプト百科事典』内田杉彦 (訳), 原書房, 1997 年。

¹編年に関しては証拠となる文字資料が少ないこともあり、研究者あるいは文献によって違いがあります。第 25 王朝に関しても誰を最初の王とするか、また王の治世年をどのように計算するのか、ということが研究者間で異なり、文献によって編年は様々です。今回は近年支持されている王位の順番、シャバタカ、シャバカ、タハルカ、タヌタマニの 4 人の王の治世年を第 25 王朝としています。

²エジプトの年代については、展示図録「大英博物館ミイラ展：古代エジプト 6 つの物語」(朝日新聞社, c2021-2022) を参照し、第 25 王朝を除くエジプト王の治世年については、「大英博物館古代エジプト百科事典」(原書房, 1997 年) を参照しました。ただし、ツタンカーメンとその周辺の王の治世年については、最新の研究成果が反映されている河合望さんの出版物を参照しました。

³スーダン遺跡紹介では「ヌビア」という用語を古代のスーダンの地理的な領域を示す用語として使用しています。ヌビアは国の名前ではない、という点をご理解いただくと良いかと思います。

⁴ナパタ期の始まりについては、はっきりした証拠がないため研究者によって年代に違いがあります。今回、ナパタ期とメロエ期の年代に関しては Marjorie M. Fisher (ed.) 2012, *Ancient Nubia: African Kingdom of*

the Nile, The American University in Cairo Press, Cairo.を参照しました。

⁵ Kendall & El-Hassan, p.8.

⁶ アメンヘテプ3世の治世に関しては研究者によって少々違いがあります。ここではアメンヘテプ3世王墓等の調査を行っている早稲田大学の編年を採用しました。

⁷ タハルカの聖舟の台座は現在、ジェベル・バルカル博物館へ移動されているようです。

⁸ Kockelmann, p.1.

⁹ イアン・ショー&ポール・ニコルソン 1997, pp.212-213. 『三柱神、トライアド triad』 参照。

¹⁰ アペデマクがジェベル・バルカルに住んでいたことを示すものとして、ケンダルはムサワラート・スフラのライオン神殿の柱に、スフィンクスの姿をしたアペデマクがジェベル・バルカルの名を冠した祠堂の中で描かれていることを挙げています (Kendall & El-Hassan, p.114, Fig.3.)。

¹¹ ネクベトは上エジプト (白冠)、ウアジェトは下エジプト (赤冠) の支配権を象徴しています。エジプトの王の称号の1つ「二女神名」(ネブティ名 Nebty) では、ネクベトとウアジェトと一緒に用いられています。